地人館
E-books

デモ版 pdf

山河を越えて　心のガイドブック

観音霊場巡拝記 4

鎌倉三十三札所

酒本幸祐 著

酒本幸祐さんの巡拝記――刊行にあたって

地人館代表　大角 修

酒本幸祐さんは六月書房という出版社の社長をしながら、故郷の四国八十八ヶ所をはじめ、あちこちの寺社詣でを欠かさない。２００４年４月には、西国・坂東・秩父に加えて鎌倉三十三観音巡拝の記録『菩薩の風景　日本百観音霊場巡拝記』を上梓された。本書はそのなかの鎌倉三十三観音巡拝の部分を再編集したものである。

ところで近年、霊感スポット、スピリチュアル、御朱印集めといった言葉とともに、寺社参りの人気が高まっているという。観音札所についても、各地の霊場会のサイトをはじめ、各種の旅行ガイドブックなどで盛んに紹介されている。にもかかわらず、もう20年も前に刊行された観音霊場巡拝記を再刊したのは、昔から庶民の楽しみだった「信心の旅」の感覚がよみがえるように思われたからである。

酒本さんは古い友人であるが、とりわけ信心深いようでもなく、何か特定の信仰をされているわけでもない。そんな強い信仰ではなく、素朴に神仏に礼拝するところに味わいがある。

たとえば、次のような文がある。

「一番杉本寺の参拝を前に、背に「南無観世音菩薩」と墨書した白衣を着て準備完了。堂内に入

ることができ、本尊の前に座して経を読んだ。一番札所であることや、寺歴を思うと、実にありがたいものがあった」

この「ありがたい」という感覚を近年流行の寺社参りの人はもつことができるだろうか。観音堂の前で撮ったVサインの写真をメールで送る世代には、もしかしたら、消えてしまった感覚かも知れない。といって、霊的なものへの関心は消えない。寺社参りから「ありがたい」という感覚が失われたとき、その心の空白に霊感とか怨霊とかカルトの恐怖がしのびよってきても不思議ではない。

この不安の時代に酒本幸祐さんの巡拝記は、ほどよく信心深くて貴重なものである。

JR の電車と大船観音　JR 東京駅から電車に乗って鎌倉へ向かう際、大船駅で乗り換える。その大船駅から見えるのが、写真の白衣観音。この像は大船観音寺の本尊・大船観音。高さが約 25m あり、台座を含めた高さが 13.35m の鎌倉大仏より 10m 以上も大きく、地域のシンボルになっている。

第一番・大蔵山杉本寺　杉本寺は、734 年に聖武天皇の后である光明皇后の発願で、藤原房前、行基によって建立された。本尊は、行基、円仁、源信がつくった十一面観音菩薩像三体である。写真は苔の階段。今は苔の保護のため登ることができないため、新しい階段を左に設けている。

第四番・海光山長谷寺　本尊の十一面観音像は、奈良・長谷寺の十一面観音像と同じ木でつくられた二体の観音像の一つ。一体を奈良・長谷寺に祀り、もう一体を祈願ののち海に流したところ十六年後に三浦半島長井海岸へ流れ着き、この地に安置されたと言われている。写真は、長谷寺の山門。特徴的な大きな提灯が目印になっている。

江ノ電と富士山　江ノ電は、神奈川県藤沢市の藤沢駅から、江ノ島駅を経由して、鎌倉市の鎌倉駅を結ぶ全線距離約 10km の鉄道。鎌倉・江ノ島観光で多くの観光客に利用されている。晴れた日は、海沿いを走る江ノ電からは富士山を望むことができる。

鎌倉札所巡拝へ

十月十一日。巡拝一日目。

たまたま十二日の土曜日から始まる三連休の前日から、正に錦秋（きんしゅう）の鎌倉（かまくら）三十三観音霊場巡拝へ出発した。天気予報も快晴とのこと。古都鎌倉は混雑も予想されたが、今回は全て歩いての巡拝であり、交通渋滞とは無縁の二泊三日という余裕の日程である。そのうえ三連休の最終日を予備日に当てる入念さである。鎌倉へいざ出発した。

午前十時過ぎの東京駅では、鎌倉観音霊場への思いを深めるためにも、出発に当たっての名句を残したいと考え、頭を左右に傾けてみても俳句は何も思い浮かばない。三連休前の金曜日とあって、列車案内のアナウンスに追われるようにホームを移動するのは、背広姿のビジネスマンばかり。霊場巡りとは無縁の光景ばかりであった。東京駅発のＪＲ東海道線に乗り、大船駅で横須賀線に乗り換えて鎌倉駅を目指した。

句も浮ばないまま車中の人となったが、四人が向かい合って座る席ではなく、車中を左右に振り分けた長い座席からは、旅情の欠片も感じられない。ひたすら大量の人を効率よく運搬する機

能だけである。

大船駅で東海道線から横須賀線に乗り換えて鎌倉へと向かう。横須賀線ホームから大船の観音様が見えた。駅からのお姿は鎌倉へ向いているのでやや横顔であるが、小高い山の上、周囲の深い緑の中に座す大きな白衣観音は、小春日和のなか美しかった。予期せずして、観音様に見送られての、鎌倉三十三観音霊場巡拝となった。

大船駅から鎌倉駅までは二駅である。この頃になるといつしか気分も高揚し、巡礼としての気持ちが高まってきた。電車は快晴の秋日の中、リズミカルな車輪の音を響かせながら鎌倉駅に到着した。

鎌倉三十三観音霊場の巡拝に入る前に、この霊場の創設と変遷について手短に紹介する。

鎌倉に幕府を開いた源頼朝（一一四七～一一九九年）は、観音信仰に篤く、関東地方の豪族に命じて、それぞれの地方で観音菩薩を本尊とする有力寺院を推挙させ、西国三十三観音霊場に模して坂東三十三観音霊場を創設した。

しかし鎌倉幕府は百四十年余の歴史を閉じる。鎌倉幕府を倒した足利氏は幕府を京都に移し、鎌倉はその後戦乱の時代を迎え、町も寺院も荒廃してしまった。

徳川家康が江戸に開府してから、平和な時代となった江戸時代中期頃より、観音霊場の巡拝が盛んになると、西国三十三観音霊場のうつしが日本各地に創設されるようになった。鎌倉は江戸からも近い距離にあり、徳川家康の保護によって、建長寺、円覚寺などは復興し、ことに浄土

宗の光明寺は手厚い保護の元にあった。鎌倉郡内にも鎌倉三十三観音霊場が創設され、霊場巡拝が盛んに行われていたが、明治維新の廃寺や移転などで、三十三観音霊場が成立しなくなってしまった。その後、昭和になって現在の形で鎌倉三十三観音霊場が再構成され、今日に至っている。現在の寺は鎌倉市内を中心としたもので、創設時の霊場と比べ、エリア的に構成の規模は小さなものとなっている。現在の霊場巡拝の距離は、ほぼ五十キロ程度だろうと思える。

地理的に見ると、鎌倉の中心にある鶴岡八幡宮を核として、東方の杉本寺から時計回りにコースが設定されていて、北鎌倉駅近くの円覚寺内にある佛日庵で結願となる。新しい時代に創設されたためか、無駄なく巡拝できる順路となっているが、札所の番号順というわけではない。一番・杉本寺、二番・宝戒寺、三番・安養院、四番・長谷寺の寺間が離れていて、その間に各寺が順番に並んでいる構成になっている。なぜこの四ヶ寺の所在地が離れているかが不思議に思えたが、資料を読むうちに理解できた。二番の宝戒寺は入っていないが、他の三ヶ寺は坂東三十三観音霊場に入っていて、その札所番号と同じであった。すなわち、坂東観音霊場での札所番号を生かすことで、変則的な札所順となっている。

無駄のない巡拝のために霊場巡拝では「逆打ち」という言葉もある通り、どうしても札所番号の通りに廻らなければならないということはない。ことに鎌倉三十三観音霊場は、この点ゆるやかなようである。鶴岡八幡宮を中心に、ほぼ東西南北に分割する形で寺が構成されていて、廻り易い巡拝の工夫が見える。

午前八時ごろから、納経所閉門の午後五時までの巡拝時間を考えれば、歩いて一泊二日の巡拝が可能である。古都鎌倉の風情を楽しむ意味からも、歩いての巡拝をお勧めしたい。

鎌倉駅前に立つと、連休前の平日ではあるが大勢の観光客で賑わっていた。まずは鶴岡八幡宮への参拝から巡礼が始まる。八幡宮から由比が浜へと一直線の若宮大路の西側、小町通りを通って八幡宮へと向う。この通りは歩行者専用で、道の左右にはいかにも古都を感じさせる食事処や茶店が並んでいる。ゆっくりと散策する観光客を追い越して歩いた。背にリュックを背負い、西国観音霊場でも愛用した金剛杖をつき、歩調はいたって快調である。こうした非日常的な空間にあると、自然と気分も高揚するものである。

ほどなく赤い大鳥居の鶴岡八幡宮正面に出た。鳥居から、舞殿、大石段を経て本宮へと参道が一直線に伸び、大臣山の深い木々に囲まれて本宮が建つ。源頼朝が鎌倉幕府を開いた時の創建になるだけに、その歴史を思わせる構えである。石敷きの参道を本宮へと歩みながら、

小春日（こはるび）やいざ鎌倉の八幡宮

歩調にあわせた語呂がいいだけで、意味不明の一句をものして本宮へと向かう。最初の句がこれでは、この巡礼中の作句は果たしてどうか恐ろしいものがあった。

舞殿(まいどの)脇を通って、大石段を登る。大石段左手には三代将軍・実朝(さねとも)を危めんと、甥の公暁(くぎょう)が隠れていたという大銀杏(おおいちょう)が青々と葉を茂らせて、八百年の歴史を見つめている。階段を登り切った拝殿前では結婚の儀が終ったばかりの新郎新婦が、多くの親族に囲まれて記念撮影の最中であった。その幸せそうな光景につられて、私も一枚撮らせてもらった。

拝殿では、今回の霊場巡拝の無事と結願を願って、二礼、二拍手、一礼。八幡宮のご朱印をいただくことも忘れなかった。

鶴岡八幡宮の赤い大鳥居を出ると、金沢街道を東へ進む。曲折はあるものの一本道である。一キロ程進むと、道幅は狭くなり滑川と平行してくる。街道の左右は小高い山が迫り、交通量も多く歩き難い道である。かつて鎌倉は難攻の都といわれたとおり、山並が自然の防御となっていることを実感する。

やがてこの街道に面して、左手に古い石段が見え、山裾へと続いている。街道からは寺らしい建物も見えない。入り口の道幅も狭く、参道両側に立ち並ぶ「十一面杉本観音」と染められた「のぼり」がなければ、見落してしまう寺の構えであった。

第一番　大蔵山杉本寺（だいぞうざんすぎもとでら）

神奈川県鎌倉市二階堂九〇三
天台宗
本尊・十一面観世音菩薩
創建・七三四年

参道を登ると、運慶（うんけい）の作と伝わる仁王像が安置された門がある、杉本寺は鎌倉三十三観音霊場の一番札所であるとともに、坂東三十三観音霊場の一番札所でもあり、風格ある仁王門からも歴史が感じられる。古人が貼ったであろう千社札が仁王門のいたるところで色褪（あ）せて、千社札そのものが景色の一つとなっている。

仁王門を抜けると再び境内への階段がある。この階段は創建当時のままかは不明だが、玉石を乱積みにした石段がすっかり苔むしたまま残されている。現在は通行不可で左手に新しい石段を設けている。こうした古い石段を見ると、先人たちの霊場巡拝の姿が現実味をもって思われる。

境内（けいだい）に立つと、地面はそのままで、何の装飾もない高床式で木造の五間四面の茅葺（かやぶき）屋根の本堂

が、山を背にポツンと建っている。これが坂東、鎌倉観音霊場の一番札所かと驚く人が多いだろう。反面、その素朴な寺の構えは、巡礼の心をなごませてもくれる。

この本堂は江戸時代前期、延宝五年（一六七七）の再建であるが、寺歴は古く奈良時代の天平六年（七三四）の創建であるという。故に秘仏本尊・十一面観音像は国宝であり、他の諸仏も、重要文化財指定や運慶（うんけい）作といったものが多い。実にありがたい寺である。

寺名の由来は、鎌倉時代の文治五年（一一六九）に類焼で本堂が燃えた時、三体の本尊像が自ら境内の大杉の下に避難したことより、杉の本観音と呼ばれるようになったということらしい。

一番杉本寺の参拝を前に、背に「南無観世音菩薩」と墨書した白衣を着て準備完了。堂内に入ることができ、本尊の前に座して経を読んだ。一番札所であることや、寺歴を思うと、実にありがたいものがあった。もちろんこの観音霊場巡拝が無事結願することを願った。

秋の日や先人の経思いつつ

経を読みながら、ここで幾人の人が私同様に経を読んだことだろうと、天平時代まで時空の旅を感じつつ杉本寺を後にした。

第十番　功臣山報国寺（こうしんざんほうこくじ）

神奈川県鎌倉市浄明寺二―七―四
臨済宗建長寺派
本尊・聖観世音菩薩

浄妙寺を出て金沢街道を横断し、滑川にかかる小さな橋を渡ると、森の木々に隠れるようにして山門が見える。報国寺入口である。この辺りは丁度（ちょうど）谷間に当るのか、報国寺の寺域も斜面であり平地は少ない。

ここまで四ヶ寺を巡拝し、朱印をいただくため寺の方とは話したが、他に誰とも触れ合うことのない巡拝であった。報国寺に来てやっと観光客に出会った。

山門前に観光用の人力車が駐めてあり、二人連れの娘が車夫（しゃふ）から説明を聞いている。山門の写真を撮りたかったが、三人の姿が中途半端に邪魔で、「写真を撮らせてください」と主語を略して言ったのが悪かったのだろう、一人の娘が山門の前でポーズを取ってくれた。私も意表を突かれてシャッターを押すことができず、瞬間ぎこちない時間が過ぎた。私の意を理解した娘は赤面

して飛び退がった。

山門を入りゆるやかな参道を本堂へ向いながら、ポーズを取ったり赤面したり、忙しい観音様だと先ほどの娘を思い出し苦笑した。

広くはない境内には今様の本堂が建ち、ことさら描写を必要ともしない。ただ寺伝を見ると、足利尊氏の祖父に当る足利家時の創建になる古寺であり、その後、尊氏から五代目の子孫である持氏は永享の乱（一四三八年）に敗れ、その子義久がこの報国寺で自害している。足利家と縁の深い寺である。

秋陽や盛衰映す陰深し

この寺は竹の寺として知られ、裏手の竹林は美しく手入れされている。この点、人力車も訪ねる寺の由縁であろう。

五ヶ寺で金沢街道沿いの寺々の巡拝を終え、街道を一キロ程戻り、岐れ道の交差点を右折して、胡桃山、天台山と連なる山腹へと歩みを進める。この辺りからはゆるやかな登り坂が続き、目指す瑞泉寺までは約二キロである。

途中の道は金沢街道に比べ直線的で、道幅も広く歩き易い。両側の家並みは三十年ほど昔に宅地開発された住宅街だという。家の構えも立派で、家並みからは歳月を感じさせる落ち着きと、

古さを感じさせた。道に面した数軒の家では、家の一部を改築して、趣味が高じたような雑貨やアンティークショップ、喫茶店などを営んでいる。お世話な事だが、何もこんな住宅地の中で商売をする必要もなかろうにと歩きながら考えた。

鎌倉駅を出発して三時間ほど歩き続けたため、履き慣れぬスニーカーの中で、指先に少し違和感があった。不思議なもので金剛杖をついて歩くと、杖でリズムをとるのでテンポはとりやすいのだが、歩調はどうしてもオーバー気味になってしまう。普段あまり歩くことをしない身には少々きついものがあった。

五百メートルほど進むと、正面に立派な神社が見えてきた。鎌倉宮(かまくらぐう)である。鳥居の前で一礼するだけで、神社を右手に迂回して瑞泉寺へと急ぐ。

鎌倉宮を過ぎると急に田舎道になる。道脇の小さな沢に沿って登ると、鬱蒼(うっそう)とした杉林の中に、瑞泉寺山門へと続く石段が見えてきた。

第十八番　天照山光明寺

神奈川県鎌倉市材木座六―一七―一九
浄土宗
本尊・如意輪観世音菩薩

補陀洛寺から小町大路を五百メートルほど南下し、材木座海岸から潮騒も聞こえてきそうな所に光明寺があった。

光明寺はかつて浄土宗の関東総本山で、江戸の増上寺（東京都港区）をしのぐ大寺だった。今もさすがに裏の天照山を背景として寺域は広く、堂塔伽藍が整備されている。鶴岡八幡宮の表門を移したという総門を入ると山門へと続く。この山門は日本有数の山門として知られ、一階が日本風、二階が中国風の豪壮なもので、天照山の大額の文字は後花園天皇の御宸筆である。山門を抜けると、広い境内に堂塔が並んでいる。

訪ねた日は光明寺でも重要な年中行事で、四日間続く「十夜大法要」の初日であった。この日は献茶式があるらしく、鮮やかな朱色やオレンジ色の無地の着物を着た寺庭婦人が、三十人程も

集まっていて、華やいだ雰囲気であった。この婦人たちをよく見ていると、年齢的な序列が見てとれた。老僧婦人、息子の嫁、娘、あるいは孫といった感じで、頭の下げ方や身の処し方に微妙な差があった。「十夜法要」は寺庭婦人の社交場でもあるらしい。本堂の中も法要の準備で忙しそうであったが、内陣に座りゆっくりと経を読んだ。堂内は広く観音様との距離もあり、諸願が届くかとも思ったが、そこはひたすらに祈るばかりであった。

手短に寺の縁起を記すと、北条時宗の叔父に当る経時の開創になり、北条執権の帰依で隆盛となる。また後花園、後土御門天皇の勅願寺ともなっている。その後、浄土宗に帰依していた徳川家康から寺領の寄進もあり大いに発展した。この時、関東十八檀林（学問所）の第一と定められた。また記主庭園（鎌倉時代に浄土宗を関東に広めた光明寺の開山、記主良忠の名にちなむ庭）は小堀遠州の作庭になる。

次の蓮乗院、千手院は光明寺総門の左右にある寺で、両寺とも小さな寺であるが、光明寺が大きいだけにより小さく感じるのはいなめない。

第四番　海光山長谷寺

神奈川県鎌倉市長谷三―一一―二

単立

本尊・十一面観世音菩薩

山門の中も人の列。斜面の曲折した参道を登り切った所に、大きな観音堂を中心に諸堂が並ぶ。壮大な寺の構えである。これらの堂も比較的新しい再建なのだろう、本体はコンクリート造りであった。

観音堂へ入って驚いた。長谷の大仏という言葉は知っていたが、大きさでなく、以前に巡拝した西国三十三観音霊場の、奈良の長谷寺の十一面観音のお姿と大きさもそっくりなのである。右手に錫杖、左手に蓮華の華瓶を持ち、十メートル弱の身丈で、金色に輝くお姿は神々しいものがある。「大きいことはいいことだ」といった音楽家がいたが「大きいことは実にありがたい」のである。

寺の縁起によれば、養老五年（七四一）に奈良の長谷寺を開山した徳道上人が、奈良の山中に

あった楠木の大木で二体の十一面観音を造らせ、一体は長谷寺に本尊として祀り、一体は縁のある地で衆生を済度するようにと海に流したという。その十六年の後、仏像は三浦半島長井海岸に流れ着き、海上で光明を放っていたという。その仏像を本尊としてこの地に移し、徳道上人を招き開山したのが、鎌倉の長谷寺と伝わる。後に足利尊氏が金箔を施し、足利義満が光背を造って納めたという。

鎌倉の観音様は、奈良の長谷寺の観音様より、像の前の空間が大きく開いていて、像全体を見ることができ、その分ありがたさは倍加するのである。

秋天や西と東の観世音

この日は快晴であり、観音堂前の境内の外れからは鎌倉市街、その向こうに相模湾が眺望でき、秋の美しい景観だった。

長谷寺の山門から、次の高徳院の山門までは約三百メートルほどの距離ではあるが、この大仏通りの雑踏は、実に芋の子を洗う如しで歩行に難渋した。

第二十三番　大異山高徳院（だいいざんこうとくいん）

神奈川県鎌倉市長谷四―二―二八
浄土宗
本尊・聖観世音菩薩

高徳院は寺名より、鎌倉大仏という方が通りが良い。境内の周囲がすっぽりと大きな樹木に覆われていて、山門を入って木陰を抜けると、玉砂利を敷いた広い境内の真ん中に忽然（こつぜん）と大仏が現われる。晴天の下、木々に囲まれて鎮座する大仏は神々しいというより、像の表面の色もまだらで、親しみが持てる感じである。この大仏は阿弥陀如来なのに与謝野晶子（よさのあきこ）が「釈迦牟尼（しゃかむに）は美男におわす」と歌に詠み、物議をかもしたが、晶子の気持ちが理解できる気がした。

大仏の前も大変な人込みであった。飛び交う言葉も「你好（ニーハオ）」「アンニョハセヨ」と実に国際色豊かなのである。眼下のこれらの光景に大仏様は何を思うのであろうか。

大仏は総高十三メートル余で、源頼朝が奈良の大仏のような尊像を造顕したいと発願したが果たせず、その遺志を侍女の稲多野局（いなだのつぼね）が継ぎ、光明寺の僧・浄光（じょうこう）が全国を歩き勧進して、寛元元年

（一二四三）に大仏と大仏殿が完成する。当初は木造であったが、完成後すぐ台風によって倒潰する。大仏完成から十年後、今度は金銅仏の鋳造で再建したが、室町時代後期の津波で建物が倒潰してしまい、現在のような露座の大仏となったのである。創建以来幾多の災難に遭われ、大仏様にしても衆生の済度は大変なことなのである。

観音堂は大仏を囲む回廊の裏手にあり、木々に囲まれた小さな堂がそれである。本尊は徳川秀忠寄進になる。回廊の裏側は表の雑踏がうそのようで、心静かに経を読むことができた。

高徳院の参拝を終えると、午後三時二十分。本日は後三ヶ寺の巡拝を終えないと、明日の巡拝順路に無駄が多くなる。明日は北鎌倉駅から巡拝に入りたいのだ。

鎌倉で手に入れた観光マップを見ると、大仏の裏手の山を通り抜けると、鎌倉駅の西口に出る道があるらしい。その道を通れば、次の寿福寺へはかなり距離と時間の短縮になる。しかしイラストの観光マップでは正確に道を探すことができず、高徳院山門前で客待ちをしていた、観光人力車の粋な兄さんに尋ねた。

私の質問に「オヤッサンの言うとおりですよ」

答えは私の思った通りで満足であったが「オヤッサン」という耳慣れない言葉がショックであった。「オッサン」と呼ばれればもっとショックだっただろうし「お兄さん」と呼んで欲しかったのかと自問自答したが、五十歳を過ぎてそれはないだろうと苦笑した。

彼の言う「オヤッさん」は実に適確な表現であると納得したが、やっぱり「お兄さん」と少し

は呼んでほしかったのかと、自分の気持に再度切り込んでみた。気恥しいが悪くもない。これから若い婦人には「お嬢さん」それ以上のご婦人には「お姉さん」と呼ぼうと考えたりした。

大仏の裏手のゆるい坂を登り切ると、藤沢鎌倉線という立派な道に出る。道幅も広くやや下り勾配で歩き易いが、足の方はだんだん重くなってくる。ともかく行けるところまで行く、全て観音様に委ねたという心境であった。本来、巡礼とはかくあるべきだと、小さな悟りを得た気もした。

道は鎌倉駅裏手に出るが、手前を左折して横須賀線に沿って進む。寿福寺はこの線路に面してある。高徳院から寿福寺までは三キロ強の距離であったが、日没との競争でもあった。

第三十三番　円覚寺（えんがくじ）　佛日庵（ぶつにちあん）

神奈川県鎌倉市山ノ内四三四
臨済宗円覚寺派
本尊・十一面観世音菩薩

円覚寺の総門に着くと、ここも大変な混雑である。

ご承知の通り、円覚寺は二度にわたる蒙古襲来（元寇）の時の戦没者の霊を弔うため、無学祖（むがくそ）元（げん）（一二二六～一二八六年）を招いて北条時宗（ほうじょうときむね）が創建した寺である。鎌倉五山の第二位に列せられる寺で、鎌倉幕府の祈願寺として栄えた。その後、幾度も火災にも遭うが、そのつど再建され現在に至っている。

現在でも七堂伽藍が整い、境内六万平方メートルの中に、十七の塔頭（たっちゅう）寺院がある。

観音霊場の寺は、これら塔頭寺院の中の佛日庵である。佛日庵は山内左奥の妙香池の上にあり、北条時宗、時宗の母覚山尼、貞時、高時など北条家の菩提所（ぼだいしょ）としての寺である。

門を入ると木々に囲まれた狭い境内の中央に、茅葺（かやぶき）の小さな堂が建っている。この堂の中に時

宗、貞時、高時の像、札所本尊である十一面観世音菩薩像が祀られている。
堂前の香炉には線香がたむけられ、参拝者の絶えることがない。また堂の前には、赤い毛氈を敷いた床几(しょうぎ)が置かれていて、多くの観光客が休んでいる。
朱印帖には結願(けちがん)の印も押されて、鎌倉三十三観音霊場の結願を実感する。
いつもそうであるが、結願の寺は去り難いもので、佛日庵でも床几に座り、いつまでも堂を見上げていた。陽ざしも暖かく、この三日間の好天がしみじみありがたかった。

鎌倉三十三観音霊場は、そのほとんどが鎌倉幕府と関わりのある寺々で、鎌倉時代にタイムスリップしたような、鎌倉歴史探訪の巡礼でもあったようだ。寺々の境内や堂前に立つ時、幾度となく、芭蕉が奥の細道紀行で詠んだ

夏草や兵(つわもの)どもが夢の跡

の句が脳裏に浮かんだ。こんな名句はとてもとても生まれなかったが、

小春日や兵どもが夢の跡

と捩(もじ)って、時代のなか鎌倉の地を駆け抜けた群像をしのんだ。

帰路、横須賀線の左手車窓に大船の観音様が迎えてくれた。しみじみこの巡礼が終ったことをこの時知った。電車のスピードに合わせて首を後に捩(ねじ)り、観音様のお姿が視界から消えるまで目で追った。

地人館 E-books オンデマンド版
紙面のイメージは電子版と異なります。

酒本幸祐（さかもと　こうすけ）

948 年　徳島県生まれ。
1969 年　大阪府立八尾高校卒。
1970 年　東京の小出版社勤務。
1978 年　美術誌発刊のため出版社六月書房を設立。
1983 年　霊園情報誌『霊園ガイド』を創刊、今日に至る。

以降、霊園ガイドへ掲載のため全国の霊場、社寺の取材参拝を続けている。主に、四国八十八ヶ所霊場、秩父三十四観音霊場、西国三十三観音霊場、坂東三十三観音霊場を巡拝し百観音巡拝を達成。他に鎌倉三十三観音霊場、みちのく三十三観音霊場など、社寺巡拝は多く、近年は修験道に関心をもち、かつて修験道の盛んだった社寺を中心に取材参拝を続けている。

観音霊場巡拝記（かんのんれいじょうじゅんぱいき）4　鎌倉三十三札所（かまくらさんじゅうさんふだしょ）

著者　酒本幸祐（さかもとこうすけ）

初版発行　2021 年 7 月 26 日

発行　地人館（ちじんかん）
〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階
Tel 03-6806-7937　Fax03-6806-7939
http://chijinkan.com/
印刷・製本　有限会社 朋栄ロジスティック

©2021 Kousuke Sakamoto